

(東京都)

多彩な魅力の活用で目指す オンラインワシンのまちづくり

八王子市が有する多彩な地域特性

東京・多摩地区(23特別区以外)最大の都市・八王子市には多彩な顔がある。

21校大学が立地し、約11万人もの学生が在学する学園都市としての顔。ミシュラン・ボワイヤジェ・プラティック・ジャボンで三つ星観光地にリストアップされた高尾山を有する、緑豊かな観光都市としての顔。山間部や大小の河川が形成する豊かな自然の維持・保全と、都市的集積との適正な共生を目指す環境共生都市としての顔。約90カ国の出身地を持つ人々が共に暮らす、多文化共生都市としての顔。歴史と文化に恵まれた伝統的な都市としての顔。伝統に培われた技や先端技術を併せ持つ産業都市としての顔。東京・西郊に開けた利便性豊かな住宅都市としての顔、などだ。

中でも八王子市の地域特性をいろいろな意味で際立たせているのが、学園都市としての

顔だ。一つの自治体に立地する大学の数、学生数、教職員数(約8000人)、人口当たりの大学の数などを総合すると、八王子市はまさに日本最大級の学園都市といえる。

「本市の本格的な学園都市づくりは昭和52年、学園都市づくりの調査・研究を目的として、大学・市民・行政の代表者で構成される学園都市協議会が発足したことに始まります。八王子市には昭和38年に工学院大学が進出して以来、40年代には10校が進出するなど、すでに大学の立地が進んでいました。しかし、昭和53年度に学生数約1万3000人(当時)の中央大学の進出が決定したところから、行政、企業、市民の間にこの地域特性を活用した、本格的な学園都市づくりを行うべきだという気運が高まり始めたのです」

そう語るのは黒須隆一八王子市長である。都心部に集中していた大学が八王子市などの多摩地区に続々と移転・進出し始めた最大の理由は、都心部の過密化とともに、「首都圏

れていること、当時としては低廉かつ広大な土地を確保できるなどの八王子市の持つ特性が、郊外への移転・進出を考えた大学側の想定した条件と合致したのです。八王子市はそういう意味で非常に恵まれていたといえます」(黒須市長)

便利かつ広大、低廉な土地を求め八王子市に移転・進出してきた大学の建設地はいずれも市街地から離れた周縁の丘陵地帯だった。しかし、こうしたプロセスを経たため、大学側と八王子市側の双方に、大学の移転・進出を契機に力を合わせて学園都市づくりをしようとする気運は当初、非常に薄かった。

「その状態のままなら、八王子市は単に大学がたくさんあるだけのまちにすぎなかったでしょう。しかし、それではいけない、大学との結びつきをもっと重視すべきだという気運が、先ほど申しあげた昭和52年ごろにまず行政、市民、企業の側に芽生え、学園都市協議会の設置を大学側に働きかけたのです」(黒須市長)

その後の動きは速かった。八王子市は昭和54年に策定した基本構想で、目指す都市像の一つとして初めて「歴史と文化を創造する学園都市」を掲げた。平成元年に策定された基本構想・計画「八王子21プラン」では産学連携への具体的な施策が盛り込まれ、平成10年策定の基本構想・計画「新八王子21プラン」ではその路線が一層強化された。さらに平成15年、市民参画の下に策定された基本構想・計画「八

の既成市街地における工業等の制限に関する法律」が昭和34年に施行され、大学の都心部での施設拡張が不可能になったことになった。この法律は平成14年に廃止され、郊外に進出・移転した大学の都心回帰現象をもたらしましたが、結果として八王子市には21校の大学が完全に根付いた。

協働の精神で進める学園都市 ネットのまちづくり

「八王子市に大学が次々移転、進出してくるに当たって、八王子市からは誘致を一切しなかったため、費用負担もありませんでした。都心部から約40kmと交通が便利なこと、都内であること、自然環境に恵まれ教育環境に優

王子ゆめおりプラン」では、大学・企業との「協働」を積極的に進めるため、「大学・大学生との連携を意識したまちづくり」「学生の特色ある活動支援と市政への参加促進」「大学・企業が地域に貢献しようとする活動支援」など、現在に至る「産・学・公・民連携」のより具体的な施策が盛り込まれた。八王子市の学園都市づくりは、四半世紀の時を経て「産・学・公・民の協働」という自発的な連携意識による、みんなのまちづくりとしての学園都市づくりへと進化する体制が整えられたのだ。

地域の人材を支える サイバーシルクロード八王子

「八王子ゆめおりプラン」に託された産・学・公・民の連携を具体的に推進する仕組みづく



今年で5回目を迎えた学園都市・八王子の新しいイベント「学生天国」



黒須隆一
八王子市長



市内に立地する中小企業の社長のカバン持ちを学生が務める「3日間社長のかばん持ち」(サイバーシルクロードの事業)



来年で50回目を迎える八王子まつりの名物は千貫神輿と呼ばれる巨大神輿

広域TAMAの持つポテンシャルの高さは、この地域を米シリコンバレーに匹敵する産業集積地とすべく、経済産業省の肝いりで平成10年、TAMA産業活性化協会（現・社団法人首都圏産業活性化協会「TAMA協会」）が設立されたことでも分かる。このTAMA協会には、八王子市のネットワーク窓口となっているのは前述のサイバースルクロード



市域周縁部に林立する大学の壮麗な建物群



全国の学園都市と立地大学が参加する「まち」=「大学」全国サミット(写真は2008年に八王子市学園都市センターで開催された第5回目)

ド八王子であり、八王子市も自治体の協会員として加盟している。「広域TAMAの先端産業における工業出荷額の規模は、すでに米シリコンバレーの2倍」といわれ、製造業が約1900社集積する八王子市はその中心です。東京都の長期計画にも多摩地区に先端産業を集積させる「多摩シリコンバレー構想」が盛り込まれており、八王子市はこの構想でも中核と位置付けられています（黒須市長）

その八王子市の独自の取り組みであるサイバースルクロードは、地域に軸足を置き、多様な活性化事業を展開している。優れた技術の交流やビジネスパートナー発掘などを行う先端技術交流会「テクニカルカンファレンス」の開催。市内在住の企業OBや公認会計士、中小企業診断士などが、財務・労務・IT化などの具体的なコーチングを中小企業やこれから起業を考慮する人を実施する「ビジネスお助け隊」。次代を担う後継者を育成する「はちおうじ未来塾」。企業と学生をつなぐ新スタイルのインターンシップ「3日間社長のかばん持ち体験」などだ。「サイバースルクロードの会長

りも、同プランの策定期間と並行して精神的に実施されていった。具体的にはまず平成13年、八王子市長の私的諮問機関「八王子市地域産業振興会議」の提言を受け、行政と商工会議所の連携による地域産業振興機関「サイバースルクロード八王子」（首都圏情報産業特区・八王子）構想推進協議会）が設立された。翌平成14年には、大学が保有する研究機能を地域の企業に提供する組織づくりを進めるべく、行政・大学・商工会議所などによる「八王子産学公連携機構」が設置された。平成16年には、地域立地の大学（現在は隣接自治体も含め23大学）などから正規科目・非正規科目の提供を受け、専門的な講座を受ければ一般市民が正規の大学単位を取得することもできるという究極の市民大学「八王子学園都市大学（いちよう塾）」が開設された。「地域特性を最大限に活用したオンラインワンのまちづくりを目指す八王子市にとって、地域に立地する大学の協力で運営される『いちよう塾』の試みは類例のない事業と自負しております。また地域に立地する中小企業の活性化を多方面から実施するサイバースルクロード八王子も、八王子市のポテンシャルを活用するための独自の仕組みづくりとして高い評価をいただいております（黒須市長）八王子市は多摩地区最大の都市だが、同時に広域多摩（以下、広域TAMA）における中心的役割をも担っている。広域TAMAとは



日本一の急こう配で知られる高尾山のケーブルカー



豊かな自然を守る市民団体は多い(写真は戸吹北森を守る会)

産・学・公・民を連携する 大学コンソーシアム八王子

学園都市としての八王子市と産業都市としての八王子市は、このように同時並行しながら規模を拡大し、先端産業の研究などにおいては強くリンクするようになっていった。そうした潮流は地域に古くから集積していたものづくり産業を刺激するとともに底力を引き

以下、多くのコーチングスタッフは八王子市内在住のシルバード世代です。皆さん現役時代にスペシャリストとして活躍された方たちです。緑豊かな住宅都市としての八王子市には、こうした優秀な人材が多く在住している強みもあります。これも地域特性の一つといえるでしょう（黒須市長）

そして両者（大学と大手企業の向上や研究機関など）の最大の受け入れ先が八王子市だった。その結果、八王子市に立地する中小零細の製造業者にも大手企業の下請け的な仕事が増え、先端技術の蓄積が自然に行われることとなった。

広域TAMAは中小企業が数多く集積するとともに、大学と同様、大手企業の工場や研究機関などの移転受け入れ先ともなってきた。広域TAMAへ先端産業が集積していくプロセスは、大学の移転・進出と同時期に行われてきた。大学の郊外への移転・進出の原因となった「首都圏の既成市街地における工業等の制限に関する法律」は大学以上に、企業に大きな影響を与えていたからだ。



学生が市長にまちづくりを提言する「市長ふれあいトーク」

また八王子市には不登校の児童・生徒たちが、豊かな大自然の懐に抱かれた環境の中で、心安らかに通える学校を実現したいという目的で開校した高尾山学園があります。この事業を実現させるまでには反対意見も多く、紆余曲折がありました。その間、私の熱意を支えていただいたのは、市民の皆さんの理解でした。幸い平成15年に構造改革特区の第1号として認定され、願いが実現しました。開校は16年度ですが、市外からもたくさんの方々が来てくれて、今では学校運営も軌道に乗って



23大学が提供する講座を受けられる「いちよう塾」は中高年に大人気

オンリーワンのまちづくりを支える 癒やしの自然環境

八王子市が学園都市、産業都市、住宅都市として戦後急速な発展を遂げた背景には、東京都内でありながら広大で水利のいい、良質かつ未開拓な土地が残っていたことが大きいことはすでに述べた。その代償として緑の一部が失われることもあったが、山林が今も市

域の半分近くを占めるなど、緑濃い環境共生都市としての存在感は健在だ。そうした環境の維持・保全に対する八王子市民の意識は、これまで述べてきたような市政への参画意識と同様、非常に高い。「市民意識の高さは、私自身、さまざまな場面で実感しているところです。例えば平成17年度に市街地に残る貴重な緑(斜面緑地)を保全するため、土地買収の費用を市民債(八王子みどり市民債)で賄いました。一人10万円から30口300万円まで計10億円の募集でしたが、なんと7倍以上もの応募がありました。

これからも抱える課題を一つずつ解消しながら、八王子市が持つ恵まれた地域特性、資源を活用し、どこまでもない個性あるまちづくりを目指したい。それが私の最大の抱負です(黒須市長)

市民が中心になって策定した長期計画「八王子ゆめおりプラン」の「ゆめおり」とは「夢織り成す」を意味する。まちづくりへの夢を一つ一つ布地に織り込むように実現していきたいという願いとともに、古来、絹織物の産地として知られる八王子の歴史に対する市民の誇りがそこには込められている。産・学・公・民の綿密な協働意識の下、多元的に展開される八王子市のオンリーワンのまちづくりの今後がさらに注目される。(取材:文 遠藤隆)



高尾山は外国人登山者も含めて平日も大にぎわい

上げた。また市民中心に策定された現行の長期計画「八王子ゆめおりプラン」が、大学・企業・行政・市民による連携の積極的推進を当然のこととしてうたっているように、八王子市の持つ多彩な地域特性は多面的というよりも、今や多元的に八王子市の「近未来」を形成しようとしているかのように見える。その象徴的な存在と位置付けられるのが、今年4月に設立された「大学コンソーシアム八王子」だ。大学コンソーシアム八王子の構成団体は、23大学(市内21大学、隣接自治体2大学)、市民団体、経済団体、学生団体、八王子市など。以下のような各種事業の推進による、さらに魅力ある学園都市の形成を目指している。

〔大学コンソーシアム八王子の目指すもの〕

地域のニーズや課題の研究活動／大学等の地域貢献活動の支援／まちの活性化(地域社会の発展)／加盟大学を全国に周知する活動／学生イベント活動等への支援／加盟大学と産業界との連携／生涯学習の推進／留学生の生活、活動支援体制の充実

「大学コンソーシアム八王子は設立されたばかりで、本格的な活動はこれからですが、これによって八王子市が実施している多彩な学園都市づくりの施策・事業の窓口が一本化されたこととなります。これまでの学園都市づくりは、いわば産・学・公・民の連携実現へ

の努力、道筋でもありました。しかし、現在では連携は自明のことになりました。これからは八王子市のまちづくりとしての学園都市づくりを、さらにその先の一歩へと踏み出させたい。大学コンソーシアムの設立目的にはそのような思いもあります(黒須市長)

大学コンソーシアムが予定している実施事業は多岐にわたる。特に興味深いのは産・学・公・民の連携による産業振興、環境共生、多文化共生など各種の地域課題について、大学を超えた研究者・学生たちが研究し合い、成果を地域に還元する「八王子未来学構想」の推進だ。これだけの規模の大学研究機関連合体が、全国的にも類例が希少なほど多元的な顔を持つ八王子地域の課題を総合的に研究することは、それだけで一つの快挙といえるだろう。



八王子市内を流れる一級河川・浅川